

「2022 ビキニデーin 高知」まとめ

2022.6.11 実行委員会にて確認

(1) 「2022 ビキニデーin 高知」の企画

2022年5月6日(金)～8日(日)の2泊3日

▼フィールドワーク室戸 5月6日(金)～7日(土) 室戸市にて

▼ビキニデーin 高知全体集会 5月8日(日) 高知市 高知城ホールにて

■事務局団体：太平洋核被災支援センター、ビキニ労災訴訟を支援する会、高知県原水爆対策協議会

《開催目的》

1. ビキニ訴訟裁判をたたかう高知の元漁船員と遺族を支援し、全国へ元漁船員の救済運動を広げます
2. 核兵器禁止運動を次世代に継承していくために、青年の参加をすすめます
3. 日本政府に、核兵器禁止条約締約国会議への参加と、条約の批准を求めます

★2022 ビキニデーin 高知開催の意義を三つ新たに確認して後半を取り組んだ

1. 世代継承を重視した意義
2. 国連軍縮部防認知した意義
3. 武力で侵略し、核兵器で威嚇するロシアの侵略を許さない集会に

◆参加者

5月6日(金)～8日(日)の参加者 **330名と発表を確認**

フィールドワーク室戸：5/6・35名参加、5/7・82名

ビキニデーin 高知全体集会：リアル参加者：160名 オンライン参加者：52名

【フィールドワーク室戸】

■5月6日(金)初日の企画は、近海マグロ船二隻を見学(35名参加)。

元船員、遺族を励ます。忘れない、語り合う、これだけは言いたい。ビキニ問題を市民的な共有とするなどを目的に、初日の6日はマグロ漁船の見学会です。参加者から「大変な状況でマグロ漁がおこなわれていることをリアルに感じた」「狭い寝床で生活していることを知り、スコールがあると喜び勇んで、浴びるといふ光景が目に見えんできました」などの感想があり、ビキニ事件当時の漁場の様子を参加者それぞれ抱いたようです。

■5月7日(土)には、82名が参加。午前と午後2つのパネルディスカッションが計画された。

午前には、間間元医師より「ビキニ事件」の調査と現在の裁判の意義についての基調報告を受け、小山求氏による室戸での調査活動が紹介され、当時マーシャルの近くで操業していた5隻のマグロ漁船員に癌の発生率が高い事などが報告された。元マグロ漁船員だった二人から「スコールがシャワーの替りであった」「食事にはマグロの刺身をよく食べた」「米は海水で洗った」こと。水揚げの時に、ガイガーカウンターが当てられたこと、軍手や髪の毛で大きく反応した事が証言された。また遺族・家族の方も9名参加され「原因がわからないままダラダラしていた」「結婚した時はビキニの事は話さなかった」など証言した。

午後は、竹峰誠一郎教授よりアメリカやカザフスタンなどでの核被災の補償について、また核実験の影

響が高知の元マグロ漁船員にどのような影響をもたらしているのか丁寧に観る必要があること、ビキニ環礁地域だけにとどまらず核実験被害の問題をグローバルな視点で取り組んでいく必要がある事などの提起がされた。

江川孝明弁護士から現在行われている2つの裁判の意義について報告。

濱田郁夫氏から「ビキニ事件」当時の新聞がどう事件をとらえ報道していたか紹介された。

感想では「ビキニ問題は終わっていないと感じた」「室戸の被ばく者の問題は歴史的な意味合いを持っており、国際的な視野でとらえなければいけない」などが出された。

フィールドワーク室戸には、地元船主組合の協力、元漁船員と遺族の方の参加、県外からも多く参加者いただいた。内容的にもマグロ漁船員の証言と、医師・研究者による内部被ばく問題の提起、そして裁判の意義など縦横に意見交流できた。

運営においては現地実行委員会がよく準備され、また日常的に「室戸の会」が元漁船員や遺族の救済活動を通して、市職員や住民の方々とのコミュニケーションをとられている事が成功を支えたといえる。

【ビキニデーin 高知全体集会】 リアル参加者：160名 オンライン参加者：52名

■司会：金井 強、森 明香の2名により定刻で開催

■オープニング

幡多高校生ゼミナールの活動が青年学生の構成劇で紹介され、参加者に感動を与えた。また合唱「世界はひとつの島なのだ」「海光るとき」「漁人(ふなびと)」は、核兵器禁止運動を次世代に継承していく力を感じさせるオープニングとなった。

■高知県健康政策部長からのメッセージ

健康政策部副部長中島様より、家康部長がコロナ対策のため出席できないことからメッセージの代読をいただきました。メッセージは「ビキニデーin 高知は、ビキニ環礁での水爆実験をはじめ、核の被災について学びあい、核のない世界の実現に向けての思いを共有することを目的に開催される取り組みは、ウクライナの問題や世界の紛争などの考えると、核兵器の廃絶や世界平和を考える大変意義深い会になると確信しています」との祝辞を頂いた。

■中満泉国連事務次長軍縮担当上級代表のビデオメッセージ

太平洋核被災支援センター並びに高知県原水協の長年の運動に敬意を表し、核兵器禁止運動を担う若い世代を励まし「若い世代の新鮮なアイデアと視点、そして太平洋核被災支援センターの皆様のような組織の支援によって私たちは、世界の最も深刻な危機のひとつを解決する方法を見つけることができるでしょう。」と締めくくった。今回のメッセージは、高知のビキニ核被災支援の運動が国連において認知されたと同時に、グローバルな視点での活躍を期待したメッセージであり参加者に感動を与えた。

■記念講演：高橋博子教授「核兵器禁止条約発効の時代に生きる世代へ」

講演は、アメリカのマンハッタン計画から、日米両政府がビキニ核実験による被災船員を第五福竜丸に限定したのはなぜしなかったのかを、米国公文書館で入手した資料から明らかにした。

特に、1954年11月15日～19日にかけて、「放射性物質の影響 と利用に関する日米会議（日本学術会議主催）」が開催され、同会議がビキニ水爆被災問題を隠匿するために最大限利用されていたことが、

米務省文書、米工作調整委員会文書、米原子力委員会文書から明らかにし、そして会議にはアリソン米大使が大きく関与していたことを解明した。

1955年1月4日、鳩山内閣は初閣議で「ビキニ被災事件の補償問題の解決に関する件」を決定し、文書を交換。日本文では「アメリカ合衆国政府は日本国民の損害の補償のため、法律上の責任の問題と関係なく感謝料として200万ドル(7億2000万円)を支払う」などとなっていますが、この感謝料は英文では「ex gratia」で、法律上の責任を伴わない「見舞金」であった事、実験は予定通り継続できるようにしたことを明らかにした。

高橋教授は最後に、核大国の核実験による放射能汚染は地球全体を覆いつくした事。地球上の南半球は既に非核兵器地帯であり、問題は北半球の核大国で、その大国のロシアがウクライナを侵略し核兵器による威嚇は核兵器禁止条約に違反であり「核抑止力論」は崩壊したことを強調した。

■パネルディスカッションテーマ：「核被災と私と未来」

「2022 ビキニデー in 高知」において、世代継承の実践の姿として最も重視した企画だった。

パネラーには、幡多高校生ゼミのOB、高知大生(森ゼミ)3名、青年教師1名とコーディネータに青年教師の宮川真幸さんが進行した。(発言の一部を紹介)

▼幡多高校生ゼミOBは、私は普通のテニス部の高校生でした。心に残っているのは幡多ゼミで始めて土佐清水に崩れかけた被災船「住吉丸」を調査した時です。ガイガーカウンターで測るとバリバリと音がしてびっくりしました。この時、第五福竜丸だけでなく高知のマグロ船も被災したことを知り、身近な問題として感じました。長崎で被爆した藤井馬さんと出会い、息子さんの節弥さんも長崎で被爆し、ビキニで被ばくし亡くなった事を聞きました。その夏、長崎を訪れ節弥さんが被爆した学校にも行きました。幡多ゼミでの学びが現在の仕事にも活かされ、ニュースで世界の起きていることを自分事としてとらえられるようになったと語った。

▼高知大生は最初に森ゼミで作成した、ビキニ被災船員を訪ね、聞き取り調査の実習の報告と、11年前の福島原発事故後の写真を紹介し「私たちはこの写真から何を感じ、何を想うのか。実習を通して、人の語りからだけでなく、モノからも『記憶の記録と継承』ができると学びました。記録に残さないと忘れられてしまう事がある。残すことで伝えられることがある。私たちの活動が足元の歴史をみつめるきっかけになりますように」と、紹介した。

▼高知大生のF・Aさんは、動画は大学で報告した10分のを6分程度再編集するのに変でしたが、内容を見返すことで改めて大切な取り組みをしたのだと実感しました。この報告動画が後輩に伝えられるようにしていきたいと思います。と作品を紹介した。

▼高知大生S・Nさんはオンラインで「今まで平和活動に関して何かをしてきたわけではないのですが、多くの方と関わらせていただいた事で自分の中で考えが少しずつ変わってきたなと思っています。特にビキニ事件の聞き取りで「学生さんはビキニ事件を過去の事件としてとらえているんだね」と言われて、歴史は教科書で学ぶ過去の出来事と思っていたことを気づかされました。実際に元船員さんや活動をされている方のお話を聞く中で、ほんとうににあった事だし、歴史は続いているし自分にかかわっているものだと思います。と発言。

▼高知大生H・Mさんもオンラインで「実習のまとめの中で、多くの方とのヒアリングや漁師さんの船

に乗って漁師さんの仕事を体験するなど濃い時間凄さしてもらいました。ビキニ事件は実習にかかわるまで全く知らなかったの、今まで教わった平和教育がすべてではない、教科書を読んだだけではだめだというのが発見でした。発見したからこそこれから何らかの形で心から平和を感じられるよう頑張りたいです。と発言。

▼高知大生 N・S さんは、聞き取り調査で印象に残っている言葉が三つありました。ひとつは「水爆実験の理不尽さに怒りをもった」という言葉です。この言葉を聞くことでビキニ水爆実験を自分事として考えていなかったことに気づきました。いろんな文献を調べ学びましたが、そこからは怒りは生まれてきませんでした。何事も自分事として向き合う事が大切だと考えています。

二つ目は「また目をつぶらないうちにいつでもおいで」という言葉です。核被害について継承することはやめてはいけないと思います。

三つめは「勉強しに来てくれてありがとう」という言葉です。この言葉には沢山の人の思いと深い歴史が詰まっていると感じました。と報告した。

▼高知大生 N・T さんは、出身は栃木県で小学 3 年の時東日本大震災を体験し、多くの小学生が転校してきました。今に考えるとなぜ幼いときに地元を離れ、栃木に転向しなければならなかったのかわかるようになりました。大学の中では核や戦争の事は話題にならず、自分の中だけの情報になっています。自分たちと同じ世代に核問題を伝えていけたらと思っています。と決意。

▼大学生を指導した森先生は、ローカルな核被災実体験はグローバルな核被災 学生たちから「あまり目を向けられていない歴史的な出来事を学びたい」と言ってくれたことが大きなきっかけでした。教員がしなきゃいけない大切なことは、若い人たちが学ぶ環境を整えてあげる事と、自由に安心して表現できる場を確保する事です。それさえあれば、柔らかい感性、柔軟な思考で大切なことをきちんとつかみ取ってくれるんだと痛感し、あらためて学生を信じる事が大切だと感じています。と振り返った。

▼青年教師 N・G さんは、教師 1 年目の一昨年 12 月に、年を明けて 3 月末には教員を辞めようと思うまで行き詰まっていた。そんな中、先輩教師に平和学習に誘われました。当時、自分の心も平和ではないのに、平和について考える、ある種の矛盾を感じながら参加しました。その時、昨年のフィールドワークで室戸に誘われ参加しました。元マグロ漁船員の遺族の方の話から力をもらい、自分の中の殻がとれ教員を続けなければと思うようになりました。今年も室戸のフィールドに参加して元漁船員や報告を聞き、去年よりより深く知ることができました。小学生にとって教室というのは平和な環境というのが一番大切だと思います。平和について子どもたちに投げかけたり、一緒に考えたりするきっかけになったと思います。と報告し参加者に勇気と元気を与えた。

▼中学教師の K・T さんは、中学校の社会科は核兵器の事になるとヒロシマ・ナガサキが中心になっています。ビキニを取上げての話にはほとんどならないので、ビキニ事件の事はこの三日間で学んだことを子どもたちにしっかり伝えていきたいと思っています。と決意を語った。

▼フローからは、指名発言をお願いし、マック・ギルさん（アメリカ出身）から「ビキニの海のねがい」紙芝居の英訳をとおして学んだ「ビキニ事件」の感想を語ってもらった。高橋博子教授にはパネル討論の感想と様々な形で若い世代との学びあいの経験、高知の青年学生への激励を頂いた。竹峰誠一郎教授にも、パネルディスカッションの感想と、核兵器禁止条約第 1 回締約国会議が 6 月に開催

され、この会議に「核兵器禁止条約第6条・7条に関する 日本の市民社会からの提言」を、各界専門家やNGO 活動家など13名が提言することが紹介された。

▼パネルディスカッションは小学校教諭で6年生を担当し、平和学習の実践を重ねるベテランの宮川さんによって、パネラー以外の幡多ゼミOB、青年教師・学生にもマイクを回し素晴らしい討論となった。

感想には「シンポジウムよかったですね！涙が出てきました」「若い人たち（大学生や採用間もない若い先生）の話は、過去や現在のことを振り返り、そして未来のことを考えさせられて励まされました」「若い人がしっかりと育つ様子が、嬉しく感動的でした。」などなど多くの感想が寄せられた、青年・学生でつくりあげたパネルディスカッションだった。

■ビキニ被ばく船員訴訟の訴え

下本節子原告団長からビキニ被ばく船員訴訟への支援の訴え、南拓人弁護士より、ビキニ被ばく船員訴訟は高知地裁（損失補償訴訟）と、東京地裁（労災保険却下の取消訴訟）との二つの裁判をたたかうことになった経緯について報告がされた。ビキニ被ばく船員訴訟を支援する会の橋元陽一事務局次長から「ビキニ核被災者救済の道を求めて」と題する資料が提供された。

■集会宣言提案

ビキニデーin 高知集会の集会宣言は、パネルディスカッションを準備した学生・青年教師らの手によって準備され、3名の大学生で参加者に提案された。

集会宣言は「過去を知り、歴史から学ぼう」「現在を見つめ、行動しつなごろう」「核のない世界の実現に向けて、語り合おう」の三つで構成された宣言案が3名の若者によって提案され、会場参加者全員の拍手で宣言を確認した。

■閉会挨拶

山下正寿太平洋核被災支援センター事務局長は、37年間ビキニ事件にかかわる中で、科学的知見が事件を解明してきた事。被災者の証言の重みと誇りが明らかになった事。青年の学びの可能性と未来への希望を語られた高知らしい集会だったと青年たちを励まし評価した。そして中満国連事務次長のビデオメッセージは会場の私たちに直接が語られたものです。私たちの運動が映像を通して世界に伝わりつつあり、国際的な交流が問われる時期に来ている。マーシャル諸島やセミパラチンスクの人々、特にそこに住む青年たちがどう考えているのかを学び交流する時期に来ている。来年のワールドワークは幡多でやります。なぜ高知県西部で幡多ゼミが誕生したのかを一緒に考えたいと参加を呼びかけた。

2022.5.8.Pm1:00 定刻閉会

(2) 後援団体

- 自治体：高知県、高知市、室戸市、土佐清水市、宿毛市、土佐市、黒潮町、安田町、奈半利町
- 高知県まぐろ船主組合、原水爆禁止日本協議会
- メディア：NHK 高知放送局、RKC 高知放送、KUTV テレビ高知、KSS さんさんTV、高知新聞社、朝日新聞高知総局、毎日新聞高知支局、読売新聞高知支局
- （公財）高知新聞厚生文化事業団助成事業